

# 教宣 せぶん

## 社長は何を感じたか？

石原損保協会長の参考人招致の「国会中継」を見ました。インターネットの発達で、こうも簡単に質疑の一部始終を目にすることができることに、あらためて「凄い」と思ってしまいます。声のトーンや顔色、臨場感、雰囲気などを、文面から読み取るとはむずかしいですが、映像はいとも簡単にそれを可能にします。投稿欄にも書かれていますが、与党議員、民主党議員の質問に答える参考人の「話し」はまさに冗舌そのものでした。また、その姿からは悪びれた様子もまったく感じませんでした。これが世間を騒がせている業界の会長、リーディングカンパニーの社長の姿なのだろうかと目を疑ってしまいました。なにか質問者に安心感のようなものを感じていたのでしょうか？

そこへいくと日本共産党の佐々木議員の質問は、この保険金不払い問題の根本と言える、企業の「利益至上主義」という体質、考え方を浮き彫りにする、鋭いものでした。また、損保会社をあげて顧客との信頼関係、絆を強くしていかなければならない矢先に、顧客との強い信頼関係を持ち、専門性を持っている私たち外勤社員の雇用を、東京地裁の判決を無視してまで切り捨てようとするのは「間違っている」と、しっかりと石原「社長」を追及してくれました。「その通りだ」と胸がすく思いでした。私たちの世論に訴える運動が、この国政の場でもしっかりと実を結んでいることを実感できました。

佐々木議員が東京海上日動社に残っている私たち外勤社員の人数を質問した場面がありましたが、石原社長は事前に準備できたはずにもかかわらず、その人数を誤って答えました。「最大・最優の財産」である社員の人数、「断腸の思い」で制度廃止した社員の人数を間違えないでもらいたいものです。発言にまた詭弁さを感じてしまいました。

社長はこの日の参考人質疑を終えて何を感じたのでしょうか？意外と「たいしたことはなかった」と感じたのでしょうか？はたまた、「まいったな」と感じたのでしょうか？もちろん社長でないとはわからないことですが、間違いなく言えることは、なぜ保険金不払い問題で招致された国会の場で、契約係社員制度の廃止問題について答えなければならないのかという「疑問」があったはずで、その「疑問」に世論の足音を実感したに違いありません。社前で発する私たちの抗議の声は耳をふさげば聞こえないでしょう。団交に出席さえしなければ私たちの要求も目にしなくても済むでしょう。しかし、私たちが世論に訴える運動は間違いなく広まりと深まりを見せています。

その一端をこの日の参考人招致で社長は感じたはずでず。次は株主総会です。もっともっと大きな世論の足音を社長に感じてもらいましょう。